2023 年 8 月 17 日発行　第６０７号

◆◇◆◇◆――――――――――――――――――――――――――――――――◆◇◆◇◆

＊＊船井メールクラブ＊＊

https://www.funai-mailclub.com

https://funai.biz/

現代に生きる「チベット医学」

◆◇◆◇◆――――――――――――――――――――――――――――――――◆◇◆◇◆

※　この文章は、**2023 年 8 月 17 日発行「船井メールクラブ 第 607 号」**に寄稿した「現代に生きる『チベット医学』」を基に、写真を加え内容をより読みやすく整理・修正したものです。

《目次》

●はじめに
●アルラの名前の由来
●今、何故チベットなのか
●五体投地とお遍路
●チベット医学
●今、何故チベット医学なのか
●アルラチベット医学センター
●チベットの薬草と生薬
●チベット医学の発祥
●チベット医学の特長
●チベット医学の実際
●チベット医学の神秘
●東洋医学の精神の象徴
●天命に生きる

●はじめに

2011 年 11 月、株式会社アルラを設立しました。「アルラ」という名前は、チベット医学で最も頻繁に使用される薬草の王様に由来しています。チベット医学は、「高僧でなければ医師になれない」とされるほど、仏教と医学が一体となった 3000 年以上の歴史を持つチベッ

ト固有の古典医学です。

一方、日本では西洋医学が主流であり、医療現場で「精神や心」を扱うことはほとんどありません。「病は気から」「病気を受け入れる気持ちが大切」「心から病気に感謝すると助かる」といった言葉を耳にすることはありますが、それが医療現場で具体的に実践されることはありません。患者が死の宣告を受けた際、仏門を叩いて高僧に教えを求めることはあっても、同じ問いを医療従事者にはしないのはなぜでしょうか。
直感的に、日本の医療業界の発展にはチベット医学が重要なヒントを提供すると感じ、次第にチベット医学の世界に引き込まれていきました。

チベット医学を知るきっかけは、ある日本人との出会いでした。前職の株式会社トータルヘルスデザインで 20 年間勤めていた際、取引先の銀行から紹介された一人の紳士が、その人物です。彼はアルラチベット医学センター日本支部の代表を務める杉本聖さんでした。
杉本さんは、その顔立ちやオーラ、言葉遣いから明確に高い精神性を感じさせる人物であり、自然と引き寄せられるように親しくなりました。
彼は青海省西寧市にあるアルラチベット医学センターの創設当初から関わり、支援を続けてきた幹部でもありました。
後に杉本さんとは病により死別することになりましたが、彼から教わったチベット医学の精神、特長、そしてその存在意義を受け継ぐ決意を固めました。
こうして、株式会社アルラの設立ミッションが定まりました。それは、日本の立場からチベット医学をサポートすることです。

●アルラの名前の由来

「アルラ」とは、シクンシ科植物の訶子（訶黎勒）**Terminalia chebula Retz** のチベット名です。チベット医学の神話によれば、「タナトゥク」と呼ばれる薬王城では、薬師如来が天神、仙人、外道・内道の諸仙人たちに医学の奥義を説法していました。
この薬王城は、太陽と月、すなわち陰と陽の 2 つの威力を備えた山の頂上に位置し、その山には寒症、

熱症、合併症などさまざまな疾病を治癒する薬草の林が広がっていると伝えられています。特に、城の東側に広がる山の斜面には、7 種類のアルラの林があり、これが薬草の象徴とされています。
アルラは、現代のチベット医薬品の中でも最も広く使用されている薬草の一つです。その効能は非常に多岐にわたり、「薬の王」として称賛されています。

●今、何故チベットなのか

2000 年以上の歴史を持つ独立国家チベットは、1949 年に中国の侵略を受けて国家を失い、その後の文化大革命（1967 年～1976 年）によって、チベット独自の国民性、文化、宗教、そしてチベット医学が存続の危機に直面しました。中国政府はチベット自治区で過酷な支配を続け、地域の伝統や生活に深刻な影響を及ぼしました。

ダライ・ラマ法王 14 世をはじめ、約 10 万人のチベット人がヒマラヤ山脈を徒歩で越え、インド北部のダラムサラに亡命。そこで中央チベット政権（亡命政権）を樹立しました。しかし、中国政府は亡命政権に対しても厳しい圧力をかけ続け、彼らが故郷へ戻ることを許しません。

一方で、チベットに留まることを選んだ人々もいました。彼らは 3000 年以上の歴史を持つチベット医学を守るため、チベット高原で採取できる薬草や自然塩、動物、鉱物を用いながら、その伝統を継承してきました。たとえ厳しい弾圧を受けても、新しい社会環境に適応しつつ、医学の発展を目指す必要に迫られていたのです。

3000 年の歴史を持つチベット医学は、神武天皇以来 2700 年以上続く天皇家の歴史に匹敵する、長い年月を積み重ねた由緒ある伝統医学です。この歴史を踏まえ、私たち日本人は、誇りある文明国として、この貴重な文化と精神を守り支援したいと考えました。

昨今、中国による南シナ海の人工島建設問題や日本の尖閣諸島の領土問題、スパイ行為、日本国内での土地買収など、外交問題が年々深刻化しています。こうした現状に向き合うためにも、中国によるチベット侵略や弾圧の歴史、そして 3000 年にわたって民族の誇りを守り抜いてきたチベット人の精神から学べることは多いはずです。

名誉理事長パンチェンラマ 10 世

チベット人が歩んできた苦難の歴史と、自国を愛し伝統を守り続けてきたその精神には、今後の日本の国家戦略にとっても重要な教訓が隠されていると考えられます。これらの学びを活かし、日本が未来に向けた確固たる方向性を築けることを願っています。

●五体投地とお遍路

チベット人は「五体投地」という礼拝作法を行います。五体投地とは、両手・両膝・額の五体を地面に投げ伏して、仏や高僧を礼拝する行為で、仏教において最も丁寧で敬虔な礼拝方法の一つとされています。

五体投地を行うチベット人の中には、ラサから西寧までの約 2000 キロの道のりを何年もかけて巡礼する人々がいます。この巡礼では、胸の前で両手を合わせて祈り、頭上から体の下へと手を移動させ、地面に完全に伏せて額を地面につけます。そして立ち上がるまでの動作を 1 回とし、約 1 メートル進むという作法をひたすら繰り返して数千キロを移動します。この巡礼の目的は、自らの私利私欲のためではなく、世界人類の健康と平和を祈るための行いです。現在でもチベットの郊外では、この五体投地を行う巡礼者の姿を見ることができます。

巡礼者を見かけたチベットの人々は、心を一つにして食事や寝床を提供して巡礼者を労います。この行為は「助けてあげる」という意識ではなく、「援助させていただく」という謙虚な心から生まれるものです。
また、お寺などでの光景では、盲目の物乞いに対してお金を投げたり置いたりする人もいますが、その物乞いよりも低い姿勢で拝みながら寄付金を丁寧に手渡す人もいます。こうした行為は、チベット文化の根底にある高い精神性を象徴しています。

日本のお遍路文化にも、五体投地と通じる精神性が見られます。お遍路とは、四国霊場八十八か所を巡る巡礼で、約 1500 キロを歩くものです。四国では「お接待」という習俗があり、巡礼するお遍路さんに茶菓や食事を振る舞ったり、宿を提供したりする風習があります。地元の人々は、白装束を身にまとったお遍路さんを弘法大師の分身として敬い、「お接待」を行うのです。
日本人がチベットを訪れた際に郷愁を感じるのは、このような精神性の共通点に由来しているのかもしれません。互いに他者を尊重し、支え合う文化は、人間の心の奥深い部分で共鳴しているのです。

●チベット医学

アーユルヴェーダはインドの古典医学として広く知られていますが、チベットには独自の古典医学である「チベット医学」が存在します。チベット医学は、チベット仏教における僧侶、ラマ僧たちによって伝承されてきた伝統医学です。この医学の特長は、医師全員が僧侶でもあるという点にあり、医学とスピリチュアルが密接に結びついています。これは現代医学にはない、重要な医学の根本精神を備えた体系です。

チベットの歴史学者や専門家たちは、チベット医学が土着の宗教であるボン教と深く関係していることから、その歴史を 3000 年に遡ると考えています。また、考古学的には 4000 年近い歴史を持つという説もあります。
チベット医学がアーユルヴェーダから北方に伝播して発展したとする説もありますが、チベットでは独自の医学であるとする考え方が主流です。その理由の一つとして、チベット仏教の四大宗派（ゲルク派、カギュー派、サキャ派、ニンマ派）がインドの釈迦から伝わったものであるのに対し、ボン教はそれ以前から存在していたチベット固有の密教であることが挙げられます。チベット医学はこのボン教と深い関係があり、古代チベットの土着医学として発展してきました。
さらに、6 世紀ごろからチベット医学は中国の漢方医学やアーユルヴェーダの影響を受け、それらの優れた要素を取り入れながら独自の発展を遂げてきました。

チベット医学を支える精神は、「慈悲慈愛の心を持ち、世のため人のために尽くす」というものです。この精神を体現する医師は「アムチ」と呼ばれ、薬師如来の化身として人々から尊敬を集めています。アムチの行いには、患者の健康を願う菩薩の姿勢が表れており、その慈悲の心がヒーリング効果をもたらすとされています。
最も尊い癒しの手段は“慈悲の心”であるとされ、これは現代医学にも通じる普遍的な教訓を含んでいます。

チベット医学は 3000 年以上にわたり、医学の根本精神を貫いてきた伝統医学です。この長い歴史は、現代医学が忘れがちな重要な教訓を私たちに与えてくれます。その教訓は、医療人のみならず、私たち一人ひとりが人として大切にすべき心のあり方を示しています。

●今、何故チベット医学なのか

チベット医学は、チベット高原に根付き、長い歴史を持つ壮大な伝統医学です。その理論は緻密に構築され、現在も体系的に完成されています。
この医学は、現代の医学では治療が困難とされる難病にも独自の効果を発揮する可能性があり、世界の医薬の花壇に咲く美しい花と言っても過言ではありません。

しかし、歴史的な出来事により、多くの教典や著作が失われ、焼き払われました。このため、チベット医学も一時は発展や継承が難しい状態に陥り、大きな被害を受けました。
それでも、チベット医学は自然科学を駆使した実践的な医学として人類のために貢献することを目的とし、その存在意義はチベット民族だけのものではなく、国境や壁を越えた全人類の財産であると考えられています。この観点から、チベット医学の普及と継承は人類全体の共同事業であると言えるでしょう。

歴史ある国々には、それぞれの伝承療法があり、医療人としての精神や哲学が長い間伝えられてきました。しかし、西洋医学が主流の日本では、日本古来の伝承療法を見る機会はほとんどありません。こうした背景の中で、チベット医学は医療の根本精神を再び呼び覚ます重要なきっかけを提供できる存在です。

特に、現在の日本では代替医療や様々な健康産業が注目を集めています。そうした分野に携わる方々には、チベット医学を通じて医学の根本精神を DNA レベルで再認識し、自らの活動に役立てていただきたいと願っています。なぜなら、チベット医学は全人類に貢献する共通の財産として長い間受け継がれてきたものであり、その精神は私たち日本人にも共有できる普遍的な価値を持っているからです。

チベット医学は、世界最古の医学の一つであり、その存在は「東洋医学の精神の象徴」とも言えるものです。その精神や価値を感じ取り、日々の医療活動の中で心の支えとすることができるなら、現代の医療従事者にとっても非常に重要な教訓となるでしょう。
チベット医学の根本精神を理解し、その叡智に触れることは、私たち一人ひとりが医療や健康について考える際の新たな視点を提供してくれるはずです。

●アルラチベット医学センター

青海省西寧市は、ダライ・ラマ法王 14 世の故郷として知られる街です。現在では中国の開発により、大きな発展を遂げつつあります。

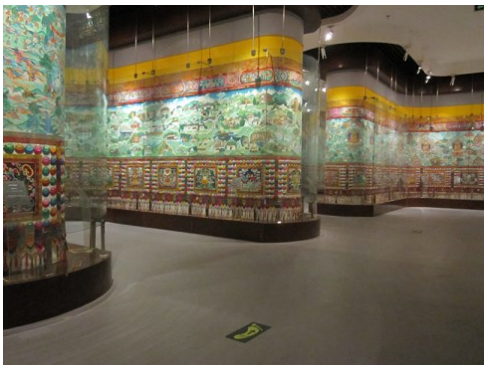
この街の中心から少し離れた山のふもとに、チベット医学の総合センターである「アルラチベット医学センター」があります。
このセンターの創始者であるアイ・ツォチェン氏は、もともとチベット医学の外科医でした。彼は医師として人々に貢献する中で、未来永劫にチベット医学を継承する総合センターの必要性を感じ、その創設に人生を捧げることを決意しました。1983 年にチベット病院を設立し、以降センターは発展を続けてきました。
その後、以下のような施設や組織が設立され、1999 年にはこれらが「アルラチベット医学センター」としてグループ化されました：

- チベット医学研究所
- 製薬会社
- チベット薬浴センター
- 未病センター
- 青海省国立大学内の修士課程を取得できる学部
- 自然保護団体（近畿圏規模）

アルラチベット医学センターは、長年継承されてきたチベット医学を絶やすことなく未来へつなげる役割を担っています。そのためには、新しい社会に順応しながら、社会や人々に貢献できる総合センターとしての機能を高めることが求められています。また、その壮大な規模や活動を通じて、チベット医学の存在意義を後世に伝え続けることを目指しています。

現在、アルラチベット医学センターグループは約 3000 人のスタッフを擁し、病院は約 1200 床を備えています。また、2018 年には「チベット民族博物館」をオープンしました。この博物館は既存のチベット医学博物館に隣接し、世界最大級のチベット博物館として多くの来訪者を迎え入れる体制を整えています。

特に注目されるのは、博物館に展示されている全長 615 メートルのチベットタンカです。このタンカは、チベット医学や歴史を一枚の絵に記したもので、20 年以上の歳月をかけて完成されました。現在ではギネスブックにも登録されています。
さらに、2018 年にはチベット医学の根本経典である「四部医典」の日本語訳全 6 巻が完成し、チベット医学の詳細を日本でも身近に学べるようになりました。



アルラチベット医学センターは、チベットの歴史から医学の実践現場までを一望できる場所として、国内外の多くの訪問者を迎えています。また、世界中の医療従事者に対して、チベット伝統医療の根幹精神を訴え続ける拠点としても機能しています。このセンターは、チベット医学を未来に向けて広めるための重要な役割を果たしています。

●チベットの薬草と生薬

標高 4000～5000 メートルのチベット高原に自生する高山植物は、強い紫外線を浴びる環境で育つため、抗酸化力が非常に優れています。これらの植物には、露地栽培の 5 倍以上の薬理成分が含まれており、また、寒暖差の激しい気候により生命力が高まるため、生薬としての有効性も極めて高いのが特徴です。

チベットでは自然保護への意識が非常に高く、自然環境への影響を最小限に抑えるよう配慮されています。必要最低限のものだけを採取し、石ひとつすらもむやみに動かさないという考え方が根付いています。また、自然の薬草だけでなく、小さな虫や微生物をも尊重し、自然界との共存を大切にしています。

薬草を採取する時期は、チベット特有の占星学や天文暦学に基づいて慎重に決定されます。

天文暦学では、薬草を採取する最適な時期や時間を計算し、例えば、生薬の原料となる花は夏季に、実は春に、根は冬に採取するなど、非常に具体的な指針が設けられています。
採取後、薬草を 30 分ほど放置すると栄養素が中心部に移動し、最も有効な部分を使うことが可能となります。このように、細部にわたる工夫が施されています。

チベット生薬の製造過程では、発酵や熟成といった処理が頻繁に行われます。これにより、薬草の効能が引き出され、陰と陽のバランスを取ることで副作用を抑える技術が確立されています。多くの生薬は「丸薬」として丸い形状にまとめられています。これらの丸薬は、飲む前にお湯に浸して柔らかくする、または噛んで割れ目を入れるといった使用方法が一般的です。
さらに、生薬の効果を最大限に発揮するため、飲む前後には冷たいものや酸っぱいものを控えることが推奨されています。また、薬草風呂を利用する際は、鍼灸との併用を避けるなど、使用方法にも細かな配慮がなされています。

アルラチベット医学センターの製薬工場では、米国 FDA の認可を取得した生薬が 3 種類程度存在します。これにより、チベット医学の生薬が国際的にも高い評価を受けていることが示されています。

●チベット医学の発祥

チベットには「病気の最初は消化不良、薬の最初は白湯」という諺があります。この言葉が示すように、チベット医学は約 3000 年前、消化不良を白湯で治療するというシンプルな考え方から始まり、次第に発展していきました。このように、チベット医学は自然に根ざした生活の知恵を基盤として育まれてきたのです。

チベット医学の特徴の一つは、動物たちの知恵を人間の医学に応用してきた点にあります。例えば、動物が病気になった際、その周囲にある特定の草を食べて病気を癒したり、鳥が産んだひびの入った卵に薬草を噛み砕いて塗り、卵を修復する様子を観察したりしました。こうした自然界の叡智を取り入れたことが、チベット医学の発展につながり、今日まで伝えられてきたのです。

8 世紀には、チベット医学の歴史上最も偉大な人物とされるユトク・ニンマ・ヨテンゴンポが現れました。彼は「薬師如来の再来」とも呼ばれるほど、125 年にわたる生涯をチベット医学の発展に捧げました。彼はチベットのコンポ地方に医学学校を設立し、約 300 人の学生が 15〜20 年という長期間にわたって学び、医術を習得したと伝えられています。

卒業生たちは各地に散り、チベット医学の普及と発展に尽力しました。ユトク・ニンマ・ヨテンゴンポ自身もインドに 3 回、ネパールに 2 回、中国に 2 回、さらにチベット各地を訪問して調査を行いました。彼は人間の性質、体の構造、そして生き方について熱心に研究し、チベット医学の根本経典である「四部医典（ギュ・シ）」を編纂しました。

「四部医典」は、現在もチベット医学を学ぶ上で欠かせない基礎的な教典です。この経典は 17 世紀、ダライ・ラマ法王五世の時代にさらなる発展を遂げ、後に世界最古の医学書の一つとして複数の言語に翻訳されました。この経典は、チベット医学の歴史と伝統を象徴する重要な文化遺産であり、現代においてもその価値は揺るぎません。

●チベット医学の特長

チベット医学は、中国の伝統医学（漢方）と同様に、自然と人間の関係を基本概念として展開されています。漢方の「陰陽」や「五行説（木・火・土・金・水）」に対し、チベット医学では「五大元素（地、水、火、風、空）」という独自の考え方を基盤としています。この五大元素は、人間の体の成り立ちや健康を理解する上で重要な役割を果たしています。

人間の体が成り立つためには、以下の要素が必要とされています：

1. サボン（種）
2. 五大元素（地、水、火、風、空）
3. 魂（ワンポ・ナムシェ）

チベット医学では、これら三つが集まることで初めて人間の体が形成されると考えられて

います。五大元素は目に見える物質だけを指すのではなく、その性質や作用も含みます。例えば、水の元素は湿った性質や水と関連するもの全般を指し、火の元素は熱やその性質を帯びたものも含みます。

チベット医学では、五大元素に基づき、人間の体の状態を以下の三つの根本要素で説明します：

1. ルン（風の元素から由来）
2. ティーパ（火の元素から由来）
3. ペーケン（地と水の元素から由来）

これら三つの要素により、七つの体質が分類されます：

1. ルン、ティーパ、ペーケンの混合体質（最良とされる体質）
2. ティーパとペーケンの混合体質
3. ペーケンとルンの混合体質
4. ティーパとルンの混合体質
5. ペーケンの単独体質
6. ティーパの単独体質
7. ルンの単独体質（最も弱い体質）

最良の体質は三つの要素がバランスよく混合している状態で、体はどのような食物や環境にも適応しやすく、病気に対する耐性が高いとされています。一方、単独体質はそれぞれの要素が過剰に反応しやすく、病気にかかりやすいとされています。

受精から誕生まで、健全な受精卵が形成されるには、微細な五大元素と魂が不可欠とされています。障害のない受精卵に五大元素と魂が揃うことで、初めて人間の体が形成されます。

誕生後も五大元素は常に体を支配し続けます。人間が摂取する食物にも五大元素が含まれており、それを体内に取り入れることで健康を維持しています。食物は、以下の要素によってその性質が決まります：

- 六つの味（甘い、酸っぱい、塩辛い、苦い、辛い、渋い）
- 八つの効力（食物が体に与える影響）
- 三つの消化後の味（摂取後の体への作用）

これらを通じて、食物の五大元素が人間の体に影響を与えると考えられています。

（参考 講演会「チベット医学入門」）

●チベット医学の実際

チベット医学は独自の診断方法と治療法を持ち、自然界から得た知識を活用して発展してきました。以下にその具体例を挙げます。

診断方法

チベット医学では、主に以下の診断方法が用いられます：

1. 脈診
   患者の五臓六腑、三つの根本要素（ルン、ティーパ、ペーケン）、五大元素（地、水、火、風、空）の状態を読み取ります。脈診による正確な診断を習得するには 10 年以上の修行が必要とされます。
2. 尿診
   早朝の最初の尿を用いて診断します。尿の色、匂い、泡立ち、質感、沈殿物などを観察し、三つの根本要素の状態を判断します。木の棒を使って尿をかき混ぜることで、細部の情報を得ることもあります。
3. 舌診
   脈診や尿診で得られた結果の確認に用いられます。舌の各部位は特定の臓器と対応しており、舌の状態を観察することで臓器の健康状態を判断します。

治療方法

チベット医学では、自然から得られた薬草や鉱物を中心に、さまざまな治療法が行われます：

1. 薬草を使った治療
   - 丸薬: チベット高原で採取された薬草を主成分とし、金や鉛などの鉱物や塩分も使用されます。これらは発酵や熟成といった複雑な処理を経て、副作用を抑えながら薬効を引き出します。
   - 薬草風呂・足湯: 薬草を用いた入浴療法で、体を温めながら治癒を促進します。
   - お香の吸引: 薬草から作られたお香を用いて、心身のバランスを整えます。
2. 物理的治療
   - 瀉血（しゃけつ）
   - 温熱療法

- 鍼灸やお灸
- 水玉療法
- 薬草エキスを用いたリンパマッサージ

生薬の特長

1. 塩の多用
   チベット医学では、約 50 種類もの天然塩を用途に応じて使い分けます。塩は特に治療の中心的な役割を果たしており、生薬に独自の効能をもたらします。
2. 陰陽のバランス
   生薬の製造過程では、陰と陽のバランスを整える工夫が施されており、副作用を最小限に抑える技術が確立されています。
3. 鉱物と植物の併用
   チベット医学の処方の約 30%は鉱物と植物を併用しています。鉱物は特に毒性を取り除くために 40 日以上の処理を行い、安全性を確保した上で使用されます。

個別対応と精密性
生薬として使用される植物は、日当たりや生息環境によって異なる性質を持つため、場所、時期、時間、生息状態など 7 つの要素を考慮して慎重に選定されます。このような細やかな対応により、患者一人ひとりに合わせた治療が可能となっています。

●チベット医学の神秘

故杉本聖さんからは、チベット医学について非常に多くの話を伺いました。その中でも、チベット医学がいかにしてこれほどまでに魅力的で偉大なものとなったのか、その理由に触れた興味深い談話があります。

2002 年 7 月、東京大学医学部名誉教授の故渥美和彦氏が日本医師会の重鎮と共に、青海省西寧にあるアルラチベット医学センターを訪問しました。ここで第一回「日中蔵医学学術交流会」が開催されたのです。この交流の契機となったのは、1999 年 5 月に渥美教授と杉本聖さんが出会い、チベット医学との深い交流が始まったことでした。
西洋医学の幹部たちがチベット医学に注目した理由の一つに、チベット医学博物館に展示

されている外科手術用の道具があります。これらは数百年前のもので、心臓や脳の手術を行っていた可能性を示唆しており、当時の西洋医学を凌駕する技術が存在していたことを物語っています。この発見は、チベット医学の奥深さと神秘性に対する関心を一層高めました。

チベット医学では「高僧でなければ医師になれない」とされ、昼間は医師として患者を診察し、夜や早朝には座禅を組む生活を送ります。この繰り返しが、チベット医学を発展させてきた要因の一つではないかと考えられています。
座禅によって「無」の状態になり、宇宙とつながることで、医学に関する問いや難題への答えを見つけることができたのではないかというのです。患者を助けたいという一心で抱えた疑問が、座禅を通じて解消され、それが積み重なることでチベット医学が発展してきたと考えられます。

日本にも、チベット医学と通じる精神性を持つ「禊（みそぎ）行」という古神道の奥義があります。この禊は、現在の神社庁の神道が成立する以前、縄文時代から続く自然崇拝に根ざした行法です。
禊では、川や海、滝などに入り、「無」の境地に達することで宇宙と一体になるとされています。この行によって日本人としての魂が開かれ、運気や能力が高まると考えられています。

●東洋医学の精神の象徴

チベット医学を初めて訪れた際、院長を務めていた故ニマ先生から伺った教訓をここに紹介します。この教訓は、故杉本聖さんを通じて伝えられたものです。
ニマ先生はこうおっしゃいました：
「チベット医学の医師は、たとえ自分の家族を殺害した犯人であっても、その人が病気で治療を求めてきた場合には医療を施さなければならない。」
この言葉は、チベット医学が全ての壁を越え、人類全体のために継承されるべき医学であることを象徴しています。中国による国の占領や弾圧を受けながらも、チベット医学を支え続けた医師たちは、いつの時代にもこの高い精神性を持ち続けていました。
ニマ先生自身もその一人でした。彼は亡くなるまで、自身のアパートの 3～4 部屋を開放し、遠方から訪れるチベット民族に寝食を提供し続けました。その献身的な姿勢は、チベット医学が単なる医療以上のものであることを物語っています。

株式会社アルラのミッションは、日本の立場からチベット医学を支援することです。その一環として、毎年「チベット医学見学ツアー」を開催してきました。このツアーでは、日本の医療関係者や経営者たちを現地に案内し、3000 年続く伝統医学を実際に見て感じていただいています。この取り組みは、忘れかけていた大切な価値観を呼び覚ますことを目的としています。

日本には、3000 年にわたる伝承医学のような歴史的医療文化はありません。せいぜい数十年、数世代にわたるものがほとんどです。一方で、チベット医学は全人類の共通財産であり、その根底にある「慈悲」の精神は東洋医学の象徴といえるものです。
日本では感じることのできない医療の根幹に触れ、医療人としての姿勢や価値観を再確認するきっかけとして、チベット医学の存在をぜひ体感していただければと願っています。

●天命に生きる

ここで、私をチベット医学の世界へ導いてくださった故杉本聖さんに、改めて感謝の意を表したいと思います。

株式会社アルラでは後に、チベット医学には存在しない「歯科」の分野を補うため、歯磨き剤の開発を手掛けることになりました。この取り組みのきっかけとなったのは、チベット医学との深い関わりでした。
訪問を重ねる中で、「なぜ総合医学であるチベット医学に歯科がないのか」という疑問が浮かびました。その答えは、口腔内の病気が現代病であるため、3000 年の歴史を持つチベット医学にはその必要性がなかったというものでした。この事実は、100 年前にカナダの歯科医師ウエストン・A・プライス氏が著した『食生活と身体の退化』でも確認されています。プライス氏は、現代食への移行が口腔内のトラブルを引き起こす原因となったことを、14 の部族を対象に調査して結論づけています。

現代医学では、歯周病が全身の生活習慣病に影響を与えることが広く知られています。歯周病菌が炎症を引き起こし、そこから菌が全身に広がることで免疫力が低下し、生活習慣病のリスクを高めるのです。
この問題はチベットにおいても無視できません。しかし、チベット医学センターに歯科を導入しようと試みたものの、西洋医学の歯学に対する関心は低く、実現にはある程度の道のり

を覚悟しなければなりませんでした。

そこで思いついたのが、「天然由来で高性能な歯磨き剤を開発すれば、チベット医学にない分野を補えるのではないか」という発想でした。幸い、前職での経験と人脈があり、この夢を形にするための土台が整っていました。簡単な道のりではありませんでしたが、「3000 年の歴史を絶やしてはならない」という信念が私を支えました。その原動力となったのは、杉本さんから教わった「決して諦めてはいけない」という教訓です。
バイオペーストは、岩塩をベースに天然成分だけで構成された歯磨き剤です。光電磁波を用いた特殊な処理を施すことで、洗浄力や殺菌力、抗菌力、さらにウイルス不活化能力を備えた万能な製品に仕上がりました。まさに、チベット医学の処方思想を取り入れた商品といえるでしょう。

時代のニーズに応える形で口コミが広がり、多くの歯科医院やクリニック、企業から OEM の依頼を受けるまでになりました。株式会社アルラも企業としての基盤を確立しつつあります。これも天国から杉本さんが見守ってくださっているおかげだと信じています。

これからも、日本の立場からチベット医学を支援し、そこから生まれた歯磨き剤「バイオペースト」を通じて、人々の健康寿命の延伸や医療費削減に貢献していきます。アルラの社是「慈悲自愛の精神をもって、世のため人のために尽くす」は、チベット医学の精神そのものです。
杉本聖さん、本当にありがとうございました。

株式会社アルラ
代表取締役社長　岩月淳

＝以上＝